ルイジ・レイタニ編ヘルダーリン全詩集の意義と限界
――テクストの配列と構築を中心に

冨塚 祐

はじめに

フリードリヒ・ヘルダーリンのテクストが学術編集の対象となってからおよそ1世紀が過ぎた。1910年代から2000年代に至るまで、計4つ、史的批判版（historisch-kritische Ausgabe）を標榜した、あるいはそう目される著作集が刊行され続けてきた。それ以外にも、編集史上言及に値する編集版（Edition）、とりわけ研究版（Studienausgabe）と呼ばれるものがいくつか製作されている[1]。

ヘルダーリンのテクスト編集史を整理した論考において触れられる編集版のうち、2001年に刊行された、ルイジ・レイタニ編集のヘルダーリン全詩集[2]（以下本稿では便宜上「レイタニ版」と呼ぶ）は、一見して特異なものである印象を抱かせる。というのは、この全詩集は、ドイツ語とイタリア語が見開きで示されている対訳版であり、研究者が用いる編集版というよりはむしろ、イタリアの読者に向けたものとして出版されたからである[3]。しかしながらレイタニ版は、それまでに刊行された編集版を底本とした対訳ではなく、むしろ既存の編集版に対する批判から出発し、新たにテクストを編集したものである。編集史がこの編集版を取り上げる理由はここにある。

では、レイタニは具体的にいかなる編集方針を掲げたのか。そしてその意義はどこに求められるのか。あるいは、どこに限界があるのか。本稿はこれらの点を整理、検証することを試みる。このうちレイタニ版の編集方針や編集史上の意義については、当該編

---

1 ヘルダーリンのテクスト編集史を概観できる文献としてはたとえば以下のものがある。Hoffmann, Dierk O. und Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*. Tübingen: Max Niemeyer 2005, S. 199-245.; Metzger, Stefan und Kreuzer, Johann (akt.): Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): *Hölderlin-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. 2., Aufl. Berlin: J. B. Metzler 2020, S. 3-14. 日本語文献では、史的批判版を中心として各編集版を主題とする論考が『編集文献学研究』第 1 号（2024 年）に収められている。ヘルダーリンの史的批判版については以下も参照。矢羽々崇:「4 つのヘルダーリン著作集――史的批判版の実際」『書物学』第 17 巻、2019 年、27-32 頁。なお、„historisch-kritische Ausgabe“ の訳語としては、これまで「歴史校訂版」「歴史批評版」といった語が、„Studienausgabe“ については「学習版」といった訳語が用いられてきたが、本稿では便宜上それぞれ「史的批判版」「研究版」と統一して表記する。史的批判版および研究版については以下も参照。森林駿介：「理念としての史的批判版――ジークフリート・シャイベを中心に」『編集文献学研究』第 1 号、2024 年、82-97 頁。；冨塚祐：「研究版とは何か――ボード・プラハタの理論と実践から」『編集文献学研究』第 1 号、2024 年、98-111 頁。

2 Hölderlin, Friedrich: *Tutte le Liriche*. Edizione tradotta e commentata e revisione del testo critico tedesco a cura di Luigi Reitani. Milano: Mondadori 2001. 以下本稿では、レイタニ版からの引用はTLLと省略し、ページ数とともに示す。

3 Vgl. Reitani, Luigi und Graham, David: Face to Face. Hölderlin in a new Italian bilingual Edition. In: *Modern Language Notes*. 117 (3), 2002, S. 590-598.

集版に関する議論や、編者自身の論考においてすでに明言されてきた[4]。本稿もこれらの論考に依拠して確認を進めていくことになる。他方で、その限界を明らかにすることもまた重要であろう。というのは、問題点を含めてレイタニ版を検証することで、来るべき新たな編集版の方向性についての考察が可能になると思われるからである。事実、後述するようにレイタニ自身が、自らの編集版を決定的なものとは捉えておらず、今後の編集が進みうる方向性を仄めかしており、それは今後の編集版のあり方を考察するうえでの重要な指針として受け取ることができる。本稿はこれらの点について、テクスト配列とテクスト構築（Textkonstitution）[5]に関する問題を中心的に取り上げることで明らかにしていく。

1. テクスト配列の基本方針

レイタニ版の第一の特徴、そして意義は、テクストの配列にある。レイタニはまず、ヘルダーリン自身が生前に公刊した詩とそうではないもの、すなわち遺稿中のテクストを区別する。そのうえで、前者を掲載された媒体ごとにまとめて提示し、続いて後者の多くを伝承されてきた手稿の束やノート類に従って配列している。こうした配列の背景には、レイタニの議論が明らかにしている、既存の編集版におけるテクストの配列が持つ限界がある。

レイタニは詩の配列に関して、時系列的な基準をもとに並べるべきか、それともジャンル（Gattungen）を基準として並べるべきか、という問いを立てる。この問いは、従来の編集版が念頭にある。それらは、その巻構成、あるいは個別の巻における詩の配列において、成立年代あるいはジャンルを基本的には見出しとしてきた。とりわけ史的批判版は、レイタニが指摘している通り、ジャンル別の区分を厳密に適用しようとしており、この基準が配列の中心に据えられているといえよう[6]。また、近年の研究版の場合、たとえばミヒャエル・クナウプ編集のいわゆるミュンヘン版[7]や、ヨッヘン・シュミット編集のドイツ古典叢書版[8]は、目次上の見出しとしてはまず成立年代が並んでいる。

---

4 本稿で引用する文献以外に、レイタニ版を対象とした書評あるいは論考としてはたとえば以下がある。Bozzetti, Mauro: Die neue italienische Hölderlin-Gesamtausgabe. In: *Hölderlin-Jahrbuch*. 32, 2000-2001, S. 366-371.; Guiriato, Davide: Der Übersetzer als Editor. Zu einer neuen deutsch-italienischen Ausgabe von Hölderlins Lyrik. In: Dieter Burdorf (Hrsg.): *Editionen und Interpretationen moderner Lyrik seit Hölderlin*. Berlin/New York: De Gruyter 2010, S. 51-60. 本稿は扱わないが、これらの文献においては全体で約 600 ページにわたる大部の注釈、そして訳語をめぐる問題についても論じられている。

5 テクスト構築とは、テクスト批判を経た、編集されたテクスト（edierter Text）、すなわち、編者が稿（Fassung）を選定し、校訂（emendieren）して読みやすい形で提示したテクストを作ることを指す。Vgl. Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*. Stuttgart: Anton Hiersemann 2020, S. 228 und 231.

6 Reitani, Luigi: Druck vs. Handschrift. Methoden und Prinzipien einer zweisprachigen Ausgabe der Gedichte Friedrich Hölderlins. Eine Bilanz. In: Dieter Burdorf (Hrsg.): *Editionen und Interpretationen moderner Lyrik seit Hölderlin*. a. a. O., S. 39-49, hier S. 39-41.

7 Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Michael Knaupp. 3 Bde. München: Carl Hanser 1992-1993. 以下本稿では、ミュンヘン版からの引用は MA と省略し、巻数およびページ数とともに示す。

8 Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Jochen Schmidt. 3 Bde. Frankfurt am Main:

そのうちレイタニはまず、成立の時系列を基準とした配列という発想自体を納得できるものであるとしつつも、ヘルダーリンのテクスト、とりわけ後期のものに関しては、そうした配列が完璧なものにはなり得ないことを指摘する。レイタニはその背景事情を大きくふたつに分けて提示している。ひとつは、正確な成立時期を特定するための証拠が欠けていること、もうひとつは、ヘルダーリンが一度書いたテクストに戻って修正を加えていたという事実である[9]。つまり、あるテクストがいつはじめにかかれ、いつ加筆修正が行われたのか、そしてそれは他の手稿に書かれているテクストとどのような前後関係にあるのか、といったことを特定することが不可能な状態にあるというのである。

他方でジャンルに基づいた配列についてもレイタニは否定的な判断を下している。その大きな理由は、ジャンル別の整理が必ずしも詩人が意図したものではないという点にある。レイタニによれば、確かにヘルダーリンにとって、詩のジャンル、形式は重要であった。詩人はその時々、自身の詩学的意図に一致する形式に、一貫性と集中力をもって繰り返し取り組んでいた。よって、特定の詩形式からの移行は、詩人の詩的想像や思考の移行とも関連している。実際に伝承された手稿束の中には、オーデのみが書き付けられたものもある。とはいえ、ジャンルに応じた分類は、必ずしも詩人の執筆プロセスを反映する一貫した基準にはなり得ない。なぜなら、ヘルダーリンが構想したモチーフは、ジャンルの垣根を超えて発展したからである。レイタニはその一例として、「ディオティマを悼むメノンの嘆き（Menons Klagen um Diotima）」を挙げ、この詩の「生成（Entstehung）を分析しようとする者は、まず、このエレギーの最初のテーマ的萌芽が含まれているオーデを考慮すべきである」と述べている[10]。すなわち、ヘルダーリンは確かに特定の時期に特定の詩形式にこだわっていたとはいえ、それらはあくまで補完的な関係にあるのであって、ジャンル別の区分はそうした文脈を切り離してしまうというのである。

いずれの区分、配列においても、編者が恣意的な文脈を作ることは避けられない。こうした分析から、レイタニは編者として、ヘルダーリンの意図を切り離すこと、あるいは恣意的に文脈を作ることを極力避ける配列を試みるに至った。「私の版（Ausgabe）においては、「トポグラフィカル（topographisch）」と言い得るような原則を拠り所にした」とレイタニは述べている。これはテクストを、「その生成あるいは出版物の場所」に従って整理することを意味している[11]。その結果が、詩人の生前に雑誌や年鑑に掲載されたテクストはその媒体に基づいて、また、手稿上のテクストについては、ノートや束のまとまりに従って提示するという先述の方針である。レイタニ版において目次上の見出しともなっている各媒体は、刊行物の場合は出版年、手稿の場合はおおまかな執筆年代に従って並べられている。もっとも、レイタニ自身が報告しているように、手稿に関してはまとまった形で伝承されてこなかったものも多いために、執筆時期やジャンルを導

Deutscher Klassiker Verlag 1992-1994.

9 Reitani: Druck vs. Handschrift, a. a. O., S. 39f.

10 Ebd., S. 40f.

11 Ebd., S. 41.

入して整理している部分もある（本稿末尾の表1参照）[12]。レイタニがいうトポグラフィカルな配列は、手稿に適応する分についてはその貫徹の難しさ、ひいては限界を示しているということができよう。

とはいえ、この配列が持つインパクトは大きい。というのは、生前に公刊された詩と、遺稿中のテクストを厳密に区分したのはレイタニがはじめてだからである[13]。遺稿中のテクストをそのノートに即して提示した、あるいは、生前の公刊媒体に基づいてテクストを提示している例は既にある。たとえば、D・E・ザトラー編集のフランクフルト版[14]は「ホンブルク二つ折りノート（Homburger Folioheft）」などをファクシミリで再現しているし、ミュンヘン版においても、目次中にこのノートの名前を見つけることができる。また、ミュンヘン版で「夜の歌（Nachtgesänge）」としてまとめられている9つの詩は、1805年に出版されたポケットブック掲載のそれである。しかし、こうした基準は全詩集、全集と呼べる範囲まで適応されてはいない。フランクフルト版の配列基準の中心はあくまでジャンルであって、生前に公刊された詩と遺稿中のテクストは配列上区分されてはいない。また、ミュンヘン版は時系列順の整理の中に、部分的にノートや生前の公刊物に基づいたテクストのまとめ方がなされているに過ぎない。つまり、ひとつの編集版のテクスト配列において、生前の公刊物あるいはノートや手稿束を中心的な基準に据え、それらの見出しを増やしたという点にレイタニ版の新規性があるのだ。

そこに見出されるのは単なる新規性のみではない。ヘルダーリンのテクストの読みをめぐる意義も有している。この点については、レイタニ自身が論じている通り、とりわけ生前の公刊物に基づいたテクストの配列に求められよう。レイタニは、「祖国のための死（Der Tod für's Vaterland）」と「婚礼を前にしたエミーリエ（Emilie vor ihrem Brauttag）」を例に、ヘルダーリン自身が詩を発表する際の意図、あるいは当時の受容を読み込むことの重要性を指摘している。これらふたつの詩は、『1800年版 教養ある女性のためのポケットブック（*Taschenbuch für Frauenszimmer von Bildung auf das Jahr 1800*）』に掲載された。このポケットブックに基づいたテクストの配列を行ったのは、筆者が確認した限り、レイタニ版がはじめてである。

「婚礼を前にしたエミーリエ」冒頭部においてエミーリエの兄は、コルシカ島を、そこの出身ではないにもかかわらず祖国と呼び、その独立のために戦死したことが描かれる。レイタニによれば、こうした祖国のための死に対して、エミーリエと結ばれる男性は政治文化的な代替案を表象しており、人間の美的教育、理想が持つ力を信じている。そこからレイタニは、「この詩は革命闘争に対する明確な拒絶をうたっている」とみる。よって、この作品を読んだ後に「祖国のための死」を読むと、それは、祖国のために命を落とすことへの単なる称揚とは異なって読めるというのである[15]。この議論について

12 Vgl. TLL, S. CXXV.

13 Vgl. ebd., S. CXX.

14 Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von D. E. Sattler u. a. 23 Bde. Frankfurt am Main: Stroemfeld/ Roterstern 1975-2008. 以下本稿では、フランクフルト版からの引用はFHAと省略し、巻数およびページ数とともに示す。

15 Reitani, Luigi: Übersetzung als Edition. Hölderlins Lyrik in einer neuen italienischen Ausgabe. Probleme und Perspektiven. In: Bodo Plachta und Winfried Woesler (Hrsg.): *Edition und Übersetzung*. Tübingen: Max

は異論もあるかもしれないが、いずれにせよここでレイタニが主張しているのは、ひとつの媒体に掲載された複数の詩を併せて読むことの重要性である。そのようにテクストを読むことによって、ヘルダーリンが詩の組み合わせでもって当時世に何を問いかけていたのか、また、当時どのように詩が受容され、いかなる詩人のイメージが作り上げられたのかという点に目が向くことになる[16]。多くの公刊物に関してこのことを可能にした点にレイタニ版の意義を求めることができる[17]。

2. テクスト構築におけるオーソライズをめぐる問題

続いて、詩人の生前に公刊されたテクストに基づいた編集に関して、よりミクロなレベル、つまりテクスト構築にまつわる問題を確認していく。レイタニは当時の公刊物に基づいてテクストを配列するのみならず、テクストの構築も行っている。本来であればその際、オーソライズ（Autorisation）をめぐる問題に直面せざるを得ない。なぜなら、ヘルダーリンの時代は、編集者によって、正書法や句読法に関するものにとどまらず、語句そのものの書き換えといったレベルに至るまでの手入れが行われていたからである。レイタニはこの点について、「さすらい人（Der Wanderer）」を例に取った論考を発表している[18]。「さすらい人」は、フリードリヒ・シラーが創刊し、編集を務めた雑誌『ホーレン（*Die Horen*）』に、1797年に掲載された。その経緯は以下のように知られている。

1797年6月20日、ヘルダーリンは、「エーテルに寄せる（An den Äther）」とともに「さすらい人」をシラーに送付した。シラーはこれらの詩をヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテに送り、意見を求める。ゲーテは「さすらい人」を批判してもいるが、『ホーレン』掲載に相応しいものともした。こうして同年10月にこの詩が公刊されることとなる。この『ホーレン』掲載のテクストは、レイタニ版におけるテクスト編集上の土台となる。

しかしこの詩の場合、そのような判断は正当性が問われることになる。というのは、ここで手稿が問題となるからだ。この詩に関して、われわれは『ホーレン』掲載のテクストのほかに、「ホンブルク四つ折りノート（Homburger Quartheft）」に書かれた初期段階の草稿と、「シュトゥットガルト手稿束（Stuttgarter Faszikel）」に書かれた清書稿という、ふたつの手稿を参照することができる。それぞれのテクストには異なる部分があり（本稿末尾の表2にて、5-12行目を顕著な例として示す）、とりわけ清書稿と『ホーレ

Niemeyer 2002, S. 317-322, hier S. 320.

16 Vgl. ebd.

17 なお、レイタニ版の配列については本稿が論じた点のほか、生前に公刊されたテクストと遺稿中のテクストを厳密に区分したことそのものにも意義が見出されている。Vgl. Martens, Gunter: Wie subjektiv darf, wie subjektiv muss eine Edition sein? Probleme der editorischen Deutung von Hölderlins ‚letzter Hymne' Die Nymphe. / Mnemosyne. In: Dieter Burdorf (Hrsg.): *Editionen und Interpretationen moderner Lyrik seit Hölderlin,* a. a. O., S. 83-102, hier S. 95.

18 Reitani, Luigi: Das Problem der Autorisation in den Hölderlin-Ausgaben. In: Thomas Bein, Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Autor – Autorisation – Authentizität.* Tübingen: Max Niemeyer 2004, S. 251-255.

ン』掲載のテクストの間にある異同の背景には、雑誌掲載時にシラーがゲーテの意見を受けて手を加えた可能性があるとされている[19]。そのような可能性があるのであれば、テクスト構築に際しては、『ホーレン』に掲載された、他者の手が入り込んでいると思われるテクストよりもヘルダーリン自身の手稿、とりわけ清書稿を土台として優先すべきであって、『ホーレン』掲載のテクストは提示する価値のあるものではない、という見解が説得的なものであるように思われてくる。事実、これまで多くの編集版がそうした対応を行ってきた。たとえば、これまでに何度か言及しているミュンヘン版はテクストを清書稿に基づいて構築しており[20]、『ホーレン』掲載のテクストにみられるヴァリアントは別巻で示されている[21]。

しかしながらレイタニは、こうした判断を退ける。その理由は、編集版において当時の公刊物に基づいたテクストを提示したいから、というものにとどまらない。ヘルダーリンの編集版の中で、こうしたテクストを扱うべき、より積極的な背景事情をレイタニは提示している。それは、ヘルダーリン自身が、詩が公刊される際の編集者によるテクストへの手入れを受け入れていたという事実である。「さすらい人」の場合、シラーと思しき手が加えられ公刊されたテクストをもとにしてヘルダーリンは別稿を構想していたようである（表2参照。そのうち特に9-11行目の類似に着目されたい）。それは最終的に、1801年の『フローラ（*Flora*）』に掲載されるに至っている。このことは、仮に編集者の手入れがあったのだとしても、そうした手入れを経たテクストを無条件に捨象すべきではないということを意味する。また、レイタニはここから一般論として、当時の作家の詩学は対話の中で発展したのであり、編集者による介入や検閲はそれ自体がテクストの歴史の一部として見られるべきものであることを述べる。そこから、草稿や途中段階のものを基に初出のテクストを校訂することは正当なものではないという結論が導かれている[22]。よってレイタニ版は、掲載媒体と手稿の間に異なる箇所がある場合でも基本的に出版物に従い、修正を明らかな誤植のみにとどめることを基本方針としているのである[23]。「さすらい人」の場合は、『ホーレン』と『フローラ』にそれぞれ掲載されたテクスト、「ホンブルク四つ折りノート」と「シュトゥットガルト手稿束」にそれぞれ書かれたテクスト、の計4つを掲載するに至っている。そして『ホーレン』掲載の稿は、手稿に基づいた手入れを避けて提示されている。このテクストにおける校訂（emendazioni）は、誤植だと判断された25行目の„ihr“を„ihm“に、61行目の„sizt“を„sich“に変更するという2点に限られている[24]。

---

19 Vgl. ebd., S. 252f.

20 Vgl. MA I, S. 178-180. なおミュンヘン版は『フローラ』掲載の稿も掲載している。Vgl. ebd., S. 305-308.

21 Vgl. MA III, S. 94.

22 Vgl. Reitani: Das Problem der Autorisation in den Hölderlin-Ausgaben, a. a. O., S. 255. 同様の立場は、「ガニュメート（Ganymed）」を例にとった論考でも示されている。Vgl. Reitani, Luigi: Spiel oder Ziel? Zur Problematik einer (un?)kritischen Emendation in Hölderlins „Ganymed“. In: *Text. Kritische Beiträge*. 5, 1999, S. 105-108.

23 Vgl. TLL, S. CXX.

24 Vgl. ebd., S. 1338.

ここまでみてきた通り、レイタニ版はその編集方針と説明によって、公刊されたテクストを読む積極的な意義を読者に提示することに成功している。その意義は大きくふたつに分けられる。ひとつは、配列のレベルで、公刊に際してのヘルダーリンの意図、あるいはそれを受容した読者という、当時の文脈の中でテクストを読むことを可能にした点である。もうひとつは、テクスト構築のレベルにおいて、オーソライズをヘルダーリンのみに還元することを避け、むしろ当時の作家、出版者らのネットワークの中から生まれたテクストを読むべき稿として数え入れた点である。後述するように公刊物に基づいたテクストの構築は問題点も有する結果となっているのだが、こうした方針は、レイタニ自身の議論の通り学術上幅広い意義を有している。

3. 手稿に基づいたテクストの構築

ここからは、レイタニが配列したテクストの後半部、つまり手稿に基づいてテクストを構築した部分に目を向ける。この部分を一見したときに目を引くのは、複数のフォントや網掛け、削除線、あるいは囲いを用いてテクストを提示している点である。つまり、手稿に書かれているテクストに関しては、〈ならされた〉テクストを提示しないという方針を基本としているのだ。レイタニは、これまでの編者が、手稿から完成された作品や何らかの美的形式を抽出するような編集を行ってきたことを批判している[25]。また、「ヘルダーリンが完成させたくなかった、あるいは完成させられなかったものを完成させることは編者の仕事ではない」とも述べている[26]。こうした立場が編集版には反映されている。

レイタニが手稿を再現する際に重視しているのはその物質としての側面である[27]。それは第一に、伝承された手稿のページと、自身の版面を対応させることに表れている。そのうえで、前述の記号を用いて、手稿の一枚一枚のレベルで、どこに何が書かれているのかを再現することが試みられている。たとえば、一度書かれた行のすぐ上に書かれたテクストはそれを再現するように配置されている。加えて、テクストの本体には含まれないが、その本体に関連した書き込み、あるいは断片的な加筆は、囲みを用いて示される。また、手稿上の空白についても、そのページが丸ごと何も書かれていない場合を除いて可能な限り版面上で表現されている。これらの書き込みの位置関係は必ずしも手稿上での位置関係に正確に対応しているわけではなく、あくまでレイタニによる整理ではある。また、示されているヴァリアントも全てではない。とはいえ、一枚の手稿上のどこに何が書かれているのかをおおむね見渡すことができるようになっている。

加えて彼は、当該ノート40ページ目の、書きつけた跡のみが付いた、インクが付着していない箇所を再現する際、ページ全体をグレーで塗りつぶし、テクストを白のフォン

25 Vgl. Reitani und Graham: Face to Face, a. a. O.

26 TLL, S. CXXIV.

27 こうした方針に関するレイタニ自身の論考としては以下を参照。Reitani, Luigi: Schreiben, setzen, einritzen. Hölderlins Schreibszene im Homburger Folioheft. In: Martin Schubert (Hrsg.): *Materialität in der Editionswissenschaft*. Berlin: De Gruyter 2010, S. 89-94.

トで示すことで、筆記具の違いがわかるような提示方法を採用した[28]。こうしてレイタニ版は、手稿が持つ物質性を読者に意識させる版面を作り上げている。レイタニの場合、手稿については完成された、閉じた形の「作品（Werk）」よりも開かれた「書字（Schrift）」としての側面を提示することに重点を置いているといえよう[29]。あるいは当該ノート40ページ目については、フランクフルト版を含め既存の編集版は筆記具の物質的なレベルでの差異を活字で表現していないことから、新たな活字での表現方法に成功したといってよいかもしれない。

このようなテクスト構築の利点について矢羽々崇は、「シュトゥットガルト二つ折りノート（Stuttgarter Foliobuch）」に書かれた、「あたかも祭りの日のごとくに農夫が畑を…（Wie wenn der Landmann am Feiertage das Land…）」からはじまるテクストの構築において、抹消線が引かれた「矢（Pfeile）」という語をレイタニ版がテクスト中で直接„~~Pfeile~~“と提示していること[30]を例に論じている。いわく、この抹消には、「ヘルダーリンの過去への思いと、同時にそこからの決別の意思」を読み取ることができる。レイタニが用いたテクストの提示方法は、こうした読みが直接的に可能になるというのである[31]。

ヴァリアントの表記方法にはさまざまな手法がある。たとえばレイタニ版と同じく「シュトゥットガルト二つ折りノート」という項目を立てテクストを構築しているミュンヘン版の場合、この箇所は別巻で提示されている[32]。フランクフルト版は手稿の翻字において、当該箇所を括弧で括って、„(Pfeile)“と示している[33]。それらの中でも、抹消線を用いて当該箇所を出しているレイタニ版は、読者にきわめて分かりやすい形でそれが削除箇所であることを示すことに成功しているといえるだろう。

もっとも、こうした読み自体は既存の編集版を用いた時に不可能なわけではない。そもそも、手稿の再現の正確性という点では、レイタニ版はフランクフルト版を乗り越えるようなものではない。書き込みの位置関係の再現性のみならず、示すヴァリアントについても選択的であるという点において、手稿への忠実さは概してフランクフルト版には劣らざるを得ない。レイタニ版の価値はむしろ、読者に対してわかりやすく、手稿上の重層的な書き込みをテクスト上で示そうと試みている点に求められるのではないかと思われる。

レイタニは自身の編集版の読者層を研究者ではなく、イタリアの一般読者と規定した。その中で手稿上のさまざまな書き込みをテクストとして示そうとしたのには、研究者と

---

28 Vgl. TLL, S. 994f.

29 編集文献学における作品と書字の問題についてはたとえば以下を参照。Neumann, Gerhard: Werk oder Schrift? Vorüberlegungen zur Edition von Kafkas „Bericht für eine Akademie“. In: Louis Hay und Winfried Woesler (Hrsg.): *Edition und Interpretation. Edition et Interprétation des Manuscrits littéraires (Jahrbuch für internationale Germanistik. Reihe A. Kongreßberichte)*. Frankfurt am Main: Peter Lang 1981, S. 154-173.

30 TLL, S. 748.

31 矢羽々崇：「ヘルダーリン 学術版編集の可能性――シュミット版、クナウプ版、レイタニ版」『編集文献学研究』第 1 号、2024 年、68-81 頁、75-77 頁。

32 MA III, S. 139f.

33 FHA Supplement II, S. 59.

一般読者の間を埋めようとする意図があったのではないかと推測する。ヘルダーリン研究、あるいは編集史のレベルにおいては、手稿上の情報は明らかに重要視されてきた。4つの史的批判版の歴史は、ヴァリアントを中心として、手稿上の様々な書き込みをどう伝えるかという問題に編者たちが骨を折ってきたことを如実に物語っている。それは、フランクフルト版が用いたファクシミリと翻字という形にひとつの結実をみたといえるだろう。こうした編集上の成果に基づいて研究者たちはヘルダーリンの手稿をめぐる解釈を積み重ねてきた。他方で、研究者以外の読者にそうした情報は必ずしもわかりやすい形で伝えられてはこなかった。とはいえ、そうした読者層にファクシミリや翻字をそのまま提供すればよいという結論にはなり得ない。なぜならそれはきわめて煩雑であり、研究者以外の読者が読み解けるものでは到底ないからである。そうであるならば、レイタニが規定したような読者層に向けて必要なのは、必ずしも手稿の全てを伝える編集版ではないということになる。そこで重要な役割を持つのは、編者の主観である。

根本的に学術編集という作業においては、グンター・マルテンスが指摘するように、編者の主観を完全に排除することはできない。それは客観性が要請された史的批判版や、ファクシミリを用いた複製においてもいえる[34]。加えて、こうした編集版の成果を一般読者に伝えようとする編集を目指す場合、編者の主観が果たす役割はさらに大きいように思われる。なぜなら、ヴァリアントをどのように提示するかという問題のみならず、その前段階として、どのヴァリアントを示すかという選択の問題が立ち上がるからである[35]。そうした判断の末の産物であるレイタニ版は研究者の利用に耐えうるものではないのかもしれない。しかしながら、この編集版の目的が研究者と一般読者との間にある、「ヘルダーリンを読む」ということが意味するギャップを埋めることを図ったものであるのならば、それは非常に有益なものであると評することができるはずだ。レイタニ版は、研究底本とはまた異なる学術編集の方向性を拓いたといえるだろう[36]。

4. 柔軟な編集実践か方針の不徹底か

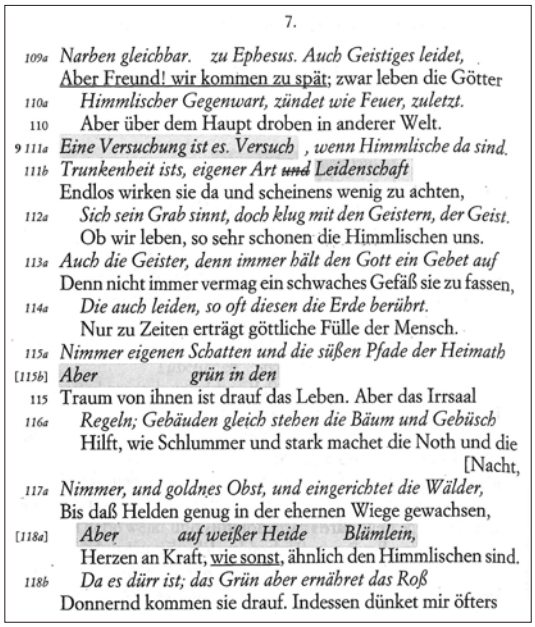
このように意義の大きいレイタニ版のテクスト構築であるが、これを編者自身の論考と照らし合わせて確認すると、問題点ないし限界も抱えているとみることもできる。というのは、レイタニは手稿にみられる書字ないし物質性を伝えることを重視していた一方で、その方針が実践のレベルで貫徹されているとは言い難いからだ。その一例として、「ホンブルク二つ折りノート」の5ページ目から10ページ目にかけて書かれている、「パ

34 Vgl. Martens: a. a. O.

35 明星聖子らは、フランツ・カフカ『審判／訴訟』の編集・翻訳に関して同様の問題を取り上げ、一般読者向けにヴァリアントを選択して示す編集が、編者の「主観抜きでは成立しえない」ことを指摘している。Vgl. 明星聖子・森林駿介・冨塚祐：「「翻訳可能なテクスト」の編集をめぐる諸問題――カフカ『審判／訴訟』の新翻訳プロジェクト」『埼玉大学紀要 教養学部』第 55 巻第 1 号、2019 年、143-155 頁。引用は 149 頁より。

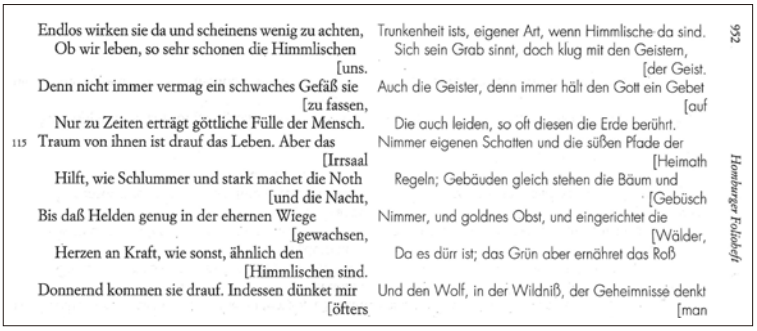
36 レイタニは自身の編集版を研究版であると述べている（Vgl. Reitani: Schreiben, setzen, einritzen, a. a. O., S. 93）。研究版の特徴として、その編集方針の多様性を指摘することができる（冨塚：前掲論文参照）。レイタニ版は研究版の多様性を示す一例としてもみることができるだろう。

ンと葡萄酒（Brod und Wein）」という題のもとで書かれた詩の編集方針をみてみたい。この詩に関しては2種類のテクストが提示されている。ひとつは、先に述べたように、複数のフォントや網掛けなどを用いて手稿を簡易的に再現しているテクストである。これには、「詳細テクスト（differenzierter Text）」という名が付されている（図1）[37]。そしてその次に、「清書と後の改訂の対照（Synopse der Reinschrift und der späteren Bearbeitung）」が示されている（図2）。これは、ページの向きを90度変えて二分割し、左側に清書と判断された、〈ならされた〉テクストを、右側には各行に対応する形で後に書き加えられた部分を示したものである[38]。


7.

109a *Narben gleichbar.* *zu Ephesus. Auch Geistiges leidet,*
Aber Freund! wir kommen zu spät; zwar leben die Götter
110a *Himmlischer Gegenwart, zündet wie Feuer, zuletzt.*
110 Aber über dem Haupt droben in anderer Welt.
9 111a *Eine Versuchung ist es. Versuch* , *wenn Himmlische da sind.*
111b *Trunkenheit ists, eigener Art ~~und~~ Leidenschaft*
Endlos wirken sie da und scheinens wenig zu achten,
112a *Sich sein Grab sinnt, doch klug mit den Geistern, der Geist.*
Ob wir leben, so sehr schonen die Himmlischen uns.
113a *Auch die Geister, denn immer hält den Gott ein Gebet auf*
Denn nicht immer vermag ein schwaches Gefäß sie zu fassen,
114a *Die auch leiden, so oft diesen die Erde berührt.*
Nur zu Zeiten erträgt göttliche Fülle der Mensch.
115a *Nimmer eigenen Schatten und die süßen Pfade der Heimath*
[115b] *Aber* *grün in den*
115 Traum von ihnen ist drauf das Leben. Aber das Irrsaal
116a *Regeln; Gebäuden gleich stehen die Bäum und Gebüsch*
Hilft, wie Schlummer und stark machet die Noth und die
[Nacht,
117a *Nimmer, und goldnes Obst, und eingerichtet die Wälder,*
Bis daß Helden genug in der ehernen Wiege gewachsen,
[118a] *Aber* *auf weißer Heide* *Blümlein,*
Herzen an Kraft, wie sonst, ähnlich den Himmlischen sind.
118b *Da es dürr ist; das Grün aber ernähret das Roß*
Donnernd kommen sie drauf. Indessen dünket mir öfters

図1　レイタニ版より「パンと葡萄酒」詳細テクスト
第7節前半部のドイツ語テクスト
出所：TLL, S. 928.


Endlos wirken sie da und scheinens wenig zu achten,
Ob wir leben, so sehr schonen die Himmlischen
[uns.
Denn nicht immer vermag ein schwaches Gefäß sie
[zu fassen,
Nur zu Zeiten erträgt göttliche Fülle der Mensch.
115 Traum von ihnen ist drauf das Leben. Aber das
[Irrsaal
Hilft, wie Schlummer und stark machet die Noth
[und die Nacht,
Bis daß Helden genug in der ehernen Wiege
[gewachsen,
Herzen an Kraft, wie sonst, ähnlich den
[Himmlischen sind.
Donnernd kommen sie drauf. Indessen dünket mir
[öfters

Trunkenheit ists, eigener Art, wenn Himmlische da sind.
Sich sein Grab sinnt, doch klug mit den Geistern,
[der Geist.
Auch die Geister, denn immer hält den Gott ein Gebet
[auf
Die auch leiden, so oft diesen die Erde berührt.
Nimmer eigenen Schatten und die süßen Pfade der
[Heimath
Regeln; Gebäuden gleich stehen die Bäum und
[Gebüsch
Nimmer, und goldnes Obst, und eingerichtet die
[Wälder,
Da es dürr ist; das Grün aber ernähret das Roß
Und den Wolf, in der Wildniß, der Geheimnisse denkt
[man

952 *Homburger Folioheft*

図2　レイタニ版より「パンと葡萄酒」清書と後の改稿の対照 第7節前半部のドイツ語テクスト
出所：TLL, S. 952.

37 TLL, S. 916-933.
38 Ebd., S. 934-959.

この処理は「パンと葡萄酒」に限定されて行われている。レイタニはこの処理について、以下のように説明している。このページ上に見られるテクストの層は複雑である。それに加え、この手稿上に見られるヴァリアントは、それが書かれる以前に書き留められていた部分に対する注釈のようなものとしても読むことができる。よってそれを示すために、詳細テクストにおいては、行間に書かれたヴァリアントはイタリックで表す。その後に対照して読むことのできるテクストを提供することで、容易に清書とヴァリアントを比較できるようになる[39]。

このうち、後者の必要性については疑義を呈しうるように思われる。手稿における行間の書き込みが、既に書かれた詩行に対する注釈であるとともにヴァリアントとしても読むことが可能であるとしても、その旨は詳細テクストと、いま引用した説明で十分に表現できているのではないか。それにもかかわらず対照用のテクストを立ち上げることによって、手稿と版面のページの流れにずれが生まれてしまう。よって、ヘルダーリンの書字の確認は、一度ここで途切れてしまうことになる。われわれは、個別のページ上の書き込みを確認できるに過ぎない。

いや、実はそれさえも不完全な形に終わっている。というのは、ノートのページを版面に対応できていないページが少なからず存在しているのである。たとえば、図1の左側にある9という数字は、「ホンブルク二つ折りノート」の9ページ目のはじまりを示している。レイタニ版では、このノートの8ページ目の最後部と、9ページ目がひとつのページ上に同居してしまっているのである。この問題に関しては、レイタニ版の版面が小さい（ミュンヘン版やドイツ古典叢書版よりもさらに一回り小さい）ことがその背景にあったようだが[40]、いずれにせよレイタニが志向した物質性の再現は不徹底に終わっているといえる。加えて、個別のテクストに鑑みて、別の手稿上のテクストを挿入している箇所、カットしているページ、ページの順序を入れ替えている箇所もある。

こうした編集は、手稿上のさまざまな書き込みに鑑みて、柔軟な編集を行なった結果だと評価することもできよう。「パンと葡萄酒」の2種類のテクストは、清書稿とみなせる部分があることを背景とした処置であるように見受けられる。しかしながら他方で、レイタニ自身が論じていた物質性という面からみると、その再現は論考から受ける印象に比べて不徹底に終わっているという見方もできるのではないか。もっとも、これは単にレイタニ版の限界というよりは、「ホンブルク二つ折りノート」をどう読み、どう編集するか、また、ヘルダーリンにおける清書稿とは何かという問題や、手稿を厳密に活字で再現することの困難、すなわち学術編集そのものの問題と関連づけて考えるべき問題であるようにも思われる。とはいえ、どこまで手稿の物質性を再現すべきであったかという点に関しては一考の余地があるのではないか。

なお、手稿に基づいたテクスト構築に関しては、もう1点指摘しておきたいことがある。それは、当該編集版の前半部、つまり公刊物に基づいてテクストを示している部分

39 Vgl. ebd., S. 1780.

40 レイタニは、自身の編集版の「小さな判型では、ホンブルク二つ折りノートの空間的な構成を忠実に再現することは不可能である」と述べている。Reitani: Übersetzung als Edition, a. a. O., S. 321.

に関連する。この部分においては、テクストが詩人の生前に公刊されている場合、伝承された手稿よりも出版物を優先してテクストを構築されていること、その際初期草稿や途中段階のものをもとにした校訂が退けられていることは先に述べた通りである。このことは裏返せば、それらの手稿がレイタニ版では参照できないことを意味している。たとえば、『1808年版 詩神年鑑（*Musenalmanach für das Jahr 1808*）』に掲載された「追想（Andenken）」は、全5節中第5節の手稿のみが残されている。矢羽々は、この手稿上に見られる書き直しから「詩人のある種のこだわり」、そして「詩全体の構造にかかわる重要な意味」を見出している[41]。しかし他方で、レイタニ版ではこの手稿が再現されていない。それは年鑑に掲載されたテクストを構築上の土台として用いているためである。よって、テクストを見るだけではこうした読みを読者に促すことができない。先述の通り、レイタニが公刊物に基づいてテクストを配列し、構築したのには、明確な理由、そして意義がある。しかしながら、それは同時に、断片的な手稿が考慮されないという結果をもたらしてもいるのである。

以上のようにレイタニ版は、テクストの配列と構築にその特徴を有しており、特に配列に関しては学術的な新規性と意義、そしてテクスト構築においては一般読者を想定読者にした時の編集版としての意義を有している。他方で、これらの特徴は限界もまた抱えているとみることもできよう。

おわりに――今後の可能性

最後に、レイタニ版のその先について考察してみたい。ヘルダーリンの詩を今後新たに編集するのであれば、どのようなものが求められるのだろうか。

まず、テクストの選定にかかわるレベルでいえば、生前に公刊された詩をどこまで収めるか、という問題を提起することができる。レイタニ版が生前の公刊媒体をテクスト配列上の優先的な基準に据えているのは先に述べた通りである。他方で生前に公刊されたもののうち、グスタフ・シュヴァープとルートヴィヒ・ウーラントが編集した1826年のヘルダーリン詩集は収められていない。その出版に詩人本人が関わっていないことがその理由であろう。しかしながら、作者が直接にかかわっていない生前刊行物を編集上の考慮の対象から外すべきか否かという問題は一意に結論を得られるものではない[42]。生前の受容という点に目を向けるのであれば、それらを入れ込んだ編集版の必要性も提起できよう。もっともそれはひとつの詩集の中にさらに別の詩集を入れ込むことを要請することになり、ページ数が大幅に膨らまざるを得ない。こうした仕事を実現するので

41 矢羽々崇：『詩人の個人性と社会性――ヘルダーリンの詩「追想」』近代文芸社、1997年、68-81頁および121頁。

42 たとえばゲーテ『若きウェルテルの悩み』の場合、初版（1774年）の出版後、誤植や手入れの多い海賊版を用いて改訂が行われた（改訂版は1787年刊）。本稿で扱ったような問題とは異なる次元の問題ではあるが、これは作者がかかわっていない刊行物の存在を編集上一概に無視できない顕著な例である。詳細は以下を参照。矢羽々崇：「著作集編集と「古典」の成立――ゲーテ『若きウェルテルの悩み』」明星聖子・納富信留編『テクストとは何か――編集文献学入門』慶應義塾大学出版会、2015年、25-46頁。；Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft*, a. a. O., S. 132ff.

あれば、レイタニ版のような全詩集においてではなく、全集におけるひとつのセクションとして、あるいは単一の編集版として生前刊行集（Drucke zu Lebzeiten）を編集する、もしくは復刻版を出版する方が現実的ではあるだろう。

続いてレイタニ自身の言葉を引きながら、テクストの配列や構築にかかわる問題をみていきたい。レイタニは、自身の編集版が決定的なものとはみていない。彼は今後の展望として、デジタル技術に新たな編集版の可能性を見出している。

> 近現代のテクストの編集版は、オリジナルを探求するというよりもむしろ、異なる文脈を有する複数の稿（Fassungen）を比較する可能性を提供すべきである。電子版（elektoronische Ausgaben）は、異なる文脈に属するテクストを対照できるように提示するという問題を解決できるかもしれない。[43]

つまり、公刊物に掲載されたテクストと、手稿上に書かれたテクストを、容易に比較できることが望ましいとレイタニはみている。レイタニ版は確かに両者を掲載しているものの、他方でその配列ゆえに、同一のタイトルを持つ複数の稿を比較するのは容易ではない。だとすれば、それら複数の稿を並べて読むことのできる電子版の有用性は大きい。

デジタル技術を用いた可能性でいえば、稿の比較以外にも、テクスト生成を可視化したものを製作できる可能性がある。たとえば現在インターネット上で閲覧可能な「ホンブルク二つ折りノート」のデジタル版は、個別のページ上における書き込みの順序を詳細に示すことに成功している。本稿で扱った「パンと葡萄酒」第7節の途中から第8節途中までが書かれた、ノート9ページ目の書き込みの場合は、合計47段階に分けて示されている。そしてその書き込み順序は、単に上から下、左から右というわけではない[44]。テクスト生成順の同定とそれに応じたデジタルでの表示は、かなりの程度進んでいるといってよいだろう。これをノート全体にわたって、あるいは、詩人がある時期に同時並行的に書かれた複数の手稿があればそれらを含めて、執筆の順序を探り、それを示すという方向も今や現実味を帯びているのではないだろうか。レイタニは自身の編集版を生成版（genetische Ausgabe）ではないとしつつも[45]、彼は明らかにヘルダーリンの書字、そしてその生成論的側面を示そうともしていた。ここに提示した可能性は、そうした方針の延長にある。

他にもさまざまな方向性を考えることができるだろう。いずれにせよ、新たな編集版を立ち上げるに際して重要な役割を果たすのは編者の主観である。レイタニは以下のように述べている。

> 〔...〕私たちの仕事の主観性を尊重し、それをタブー視しないようになることがで

43 Reitani: Das Problem der Autorisation in den Hölderlin-Ausgaben, a. a. O., S. 255.

44 Hölderlin, Friedrich: Homburger Folioheft. Diachrone Darstellung. Hrsg. von Hans Gerhard Steiner. 2022. (https://homburgfolio.wlb-stuttgart.de/handschrift/307-09 (Zugang: 20.9.2024))

45 Vgl. Reitani: Druck vs. Handschrift, a. a. O., S. 49.

きれば、私たちはテクストの物質性を、説得力をもって示すことのできるモデルを発展させることになるだろう。[46]

ここで考えるべきは、新たに編集版を立ち上げる際は、レイタニ版を含め既存の編集版そのものからは一度離れ、手稿に書き付けられたテクスト、そしてそれらが持つ物質性のうち、何を伝えるべきか、そしてそれらをどのように配列するか、という問題をいちから考えなくてはならないということであろう。なぜならレイタニ版は、あくまでレイタニの主観を通じた産物でしかないからである。それはすなわち、本稿で指摘したような問題点を何らかの形で解決しても、レイタニ版は決定的な編集版としては必ずしも機能しないことを意味する。新たな編集版の編者は、自身の主観を通じたヘルダーリンの読み、そしてレイタニ版を含めたこれまでの編集版が示してきた編集方針をどう取捨選択し、あるいは発展させていくのかを検討しなくてはならない。それはどのような読者を想定した編集版を試みるのか、あるいはそもそも、手稿をどう読み、作品と書字のバランスをどう考えるかといった問題と不可分だ。そしてそのような検討の末得られる編集版は間違いなく、編者の主観を通じたものである。いずれにせよ新たな編者にまず求められるのは、自らの主観性と向き合う作業であろう。編集史上の問題や穴を埋める、あるいは、これまでの編集版が持つ意義を拡大させる新たな編集版の可能性は十分に残されている。われわれに求められているのは編集史の記述をレイタニ版で終わらせることではなく、その先を担うことである[47]。

参考文献

Bozzetti, Mauro: Die neue italienische Hölderlin-Gesamtausgabe. In: *Hölderlin-Jahrbuch*. 32, 2000-2001, S. 366-371.

Guiriato, Davide: Der Übersetzer als Editor. Zu einer neuen deutsch-italienischen Ausgabe von Hölderlins Lyrik. In: Dieter Burdorf (Hrsg.): *Editionen und Interpretationen moderner Lyrik seit Hölderlin*. Berlin/ New York: De Gruyter 2010, S. 51-60.

Hoffmann, Dierk O. und Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*. Tübingen: Max Niemeyer 2005, S. 199-245.

46 Reitani: Schreiben, setzen, einritzen, a. a. O., S. 94.

47 筆者は、ヘルダーリンの詩を新たに翻訳、ひいては翻訳の基盤となるテクストを新たに編集するプロジェクトに参加している。2023 年 7 月 15 日には成城大学国際編集文献学研究センター主催のシンポジウムが開催され、そこでは、これまでの編集版がどのようなものであったのかをあらためて確認することで、今後の新たな編集をめぐって思考するための土台が築かれた 。詳細は『編集文献学研究』第 1 号（2024 年）を参照されたい。本稿はそうした試みのひとつである。また、現在も定期的に研究会が開かれ、ヘルダーリンの詩を日本の読者層に届けるための編集と翻訳のあり方をめぐり、個別の詩に基づいて議論が重ねられている。2024 年 12 月 21 日開催予定の上記研究センター主催のシンポジウムと 2025 年に発行予定の『編集文献学研究』増刊号にて、その中間報告が発表される予定である。

Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von D. E. Sattler u. a. 23 Bde. Frankfurt am Main: Stroemfeld/ Roterstern 1975-2008. =FHA

Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Michael Knaupp. 3 Bde. München: Carl Hanser 1992-1993. =MA

Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Jochen Schmidt. 3 Bde. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1992-1994.

Hölderlin, Friedrich: *Tutte le Liriche*. Edizione tradotta e commentata e revisione del testo critico tedesco a cura di Luigi Reitani. Milano: Mondadori 2001. =TLL

Hölderlin, Friedrich: Homburger Folioheft. Diachrone Darstellung. Hrsg. von Hans Gerhard Steiner. 2022. (https://homburgfolio.wlb-stuttgart.de (Zugang: 20.9.2024))

Martens, Gunter: Wie subjektiv darf, wie subjektiv muss eine Edition sein? Probleme der editorischen Deutung von Hölderlins „letzter Hymne“ Die Nymphe./ Mnemosyne. In: Dieter Burdorf (Hrsg.): *Edition und Interpretation moderner Lyrik seit Hölderlin*. Berlin/ New York: De Gruyter 2010, S. 82-102.

Metzger, Stefan und Kreuzer, Johann (akt.): Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): *Hölderlin-Handbuch. Leben – Werk – Wirkun*g. 2., Aufl. Berlin: J. B. Metzler 2020, S. 3-14.

森林駿介：「理念としての史的批判版――ジークフリート・シャイベを中心に」『編集文献学研究』第1号、2024年、82-97頁。

明星聖子・森林駿介・冨塚祐：「「翻訳可能なテクスト」の編集をめぐる諸問題――カフカ『審判／訴訟』の新翻訳プロジェクト」『埼玉大学紀要 教養学部』第55巻第1号、2019年、143-155頁。

Neumann, Gerhard: Werk oder Schrift? Vorüberlegungen zur Edition von Kafkas „Bericht für eine Akademie“. In: Louis Hay und Winfried Woesler (Hrsg.): *Edition und Interpretation. Edition et Interprétation des Manuscrits littéraires (Jahrbuch für internationale Germanistik. Reihe A. Kongreßberichte)*. Frankfurt am Main: Peter Lang 1981, S. 154-173.

Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*. Stuttgart: Anton Hiersemann 2020.

Reitani, Luigi: Spiel oder Ziel? Zur Problematik einer (un?)kritischen Emendation in Hölderlins „Ganymed“. In: *Text. Kritische Beiträge*. 5, 1999, S. 105-108.

Reitani, Luigi: Übersetzung als Edition. Hölderlins Lyrik in einer neuen italienischen Ausgabe. Probleme und Perspektiven. In: Bodo Plachta und Winfried Woesler (Hrsg.): *Edition und Übersetzung*. Tübingen: Max Niemeyer 2002, S. 317-322.

Reitani, Luigi: Das Problem der Autorisation in den Hölderlin-Ausgaben. In: Thomas Bein, Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Autor – Autorisation – Authentizität. Tübingen*: Max Niemeyer 2004, S. 251-255.

Reitani, Luigi: Druck vs. Handschrift. Methoden und Prinzipien einer zweisprachigen Ausgabe der Gedichte Friedrich Hölderlins. Eine Bilanz. In: Dieter Burdorf (Hrsg.): *Editionen und Interpretationen moderner Lyrik seit Hölderlin*. Berlin/ New York: De Gruyter 2010, S. 35-49.

Reitani, Luigi: Schreiben, setzen, einritzen. Hölderlins Schreibszene im Homburger Folioheft.

In: Martin Schubert (Hrsg.): *Materialität in der Editionswissenschaft.* Berlin: De Gruyter 2010, S. 89-94.

Reitani, Luigi und Graham, David: Face to Face. Hölderlin in a new Italian bilingual Edition. In: *Modern Language Notes*. 117 (3), 2002, S. 590-598.

冨塚祐：「研究版とは何か――ボード・プラハタの理論と実践から」『編集文献学研究』第1号、2024年、98-111頁。

矢羽々崇：『詩人の個人性と社会性――ヘルダーリンの詩「追想」』近代文芸社、1997年。

矢羽々崇：「著作集編集と「古典」の成立――ゲーテ『若きウェルテルの悩み』」明星聖子・納富信留編『テクストとは何か――編集文献学入門』慶應義塾大学出版会、2015年、25-46頁。

矢羽々崇：「4つのヘルダーリン著作集――史的批判版の実際」『書物学』第17巻、2019年、27-32頁。

矢羽々崇：「ヘルダーリン 学術版編集の可能性――シュミット版、クナウプ版、レイタニ版」『編集文献学研究』第1号、2024年、68-81頁。

1	*Musenalmanach fürs Jahr 1792* (Tübinger Hymnen I)	25	Früheste Gedichte – 1784-1787
2	*Die Einsiedlerinn aus den Alpen*	26	Marbacher Quartheft
3	*Poetische Blumenlese fürs Jahr 1793* (Tübinger Hymnen II)	27	Jugendgedichte – 1787-1789
4	*Urania*	28	Aus dem Bundesbuch (Tübinger Hymnen III)
5	*Neue Thalia*	29	Tübinger Hymnen IV
6	*Musen-Almanach für das Jahr 1796*	30	Verstreute Gedichte – Frankfurt 1796-1797
7	*Almanach und Taschenbuch für häusliche und gesellschaftliche Freuden 1797*	31	An Schiller gesandte Gedichte 1795-1797
8	*Die Horen*	32	Homburger Quartheft
9	*Musen-Almanach für das Jahr 1798*	33	Epigramme und Fragmente
10	*Musen-Almanach für das Jahr 1799*	34	Stuttgarter Faszikel
11	*Taschenbuch für Frauenzimmer von Bildung auf das Jahr 1799*	35	Oden – Entwurfsfaszikel I
12	*Taschenbuch für Frauenzimmer von Bildung auf das Jahr 1800*	36	Druckvorlage für Schiller – 30. Juni 1798
13	*Brittische Damenkalender und Taschenbuch für das Jahr 1800*	37	Oden – Entwurfsfaszikel II
14	*Für Herz und Geist 1801*	38	Stuttgarter Foliobuch
15	*Aglaia 1801*	39	Oden – Stuttgarter Reinschriftsfaszikel
16	*Flora 1801*	40	Andere Oden – 1798-1800
17	*Musen-Almanach für das Jahr 1802-1803*	41	Gelegenheitsgedichte 1799-1800
18	*Flora 1802*	42	Elegie und Fragmente
19	*Vierteljährliche Unterhaltungen*	43	Elegien
20	*Taschenbuch für das Jahr 1805* (Nachtgesänge)	44	Friedensfeier
21	*Würtembergisches Taschebuch auf das Jahr 1806*	45	Homburger Odenfaszikel
22	*Musenalmanach für das Jahr 1807*	46	Homburger Folioheft
23	*Musenalmanach für das Jahr 1808*	47	Späte Hymnen – Entwürfe, Bruchstücke, Bearbeitungen
24	Anhang. Aus dem Phaëron von Waiblinger	48	Turmgedichte

表1　レイタニ版におけるテクスト配列（通し番号は筆者による便宜上のもの）。左側は「雑誌や年鑑に掲載された詩（Poesie apparse su riviste e almanacchi）」。雑誌、年鑑はイタリックで示した。右側は「遺稿からの詩（Poesie dal lascito）」。ノートや手稿束の語が見出しに含まれているものには下線を付した。出所：レイタニ版巻末の一覧における「総目次（Indice generale）」（TLL, S. 1946-1966）より筆者作成。

Homburger Quartheft (TLL, S. 616.)	Stuttgarter Faszikel (TLL, S. 654)
[5] Nicht wie der Liebesgott mit lieblich schmerzlichem Pfeile, [6] Hart, wie ein Zepterschlag, traf sie der brennende Stral. 5 Fernhin schlich das haagre Gebirg, wie ein wandernd [Gerippe Hohl und einsam und kahl blikt aus der Höhe sein Haupt. Ach! hier sprang, wie sprudelnder Quell, der unendliche [Wald nicht In die tönende Luft üppig und herrlich empor. Hier frolokten die Jünglinge nicht, die stürzenden Bäche, 10 Ins jungfräuliche Thal hoffend und liebend hinab, 2 Freundlich blikte kein Dach aus der Blüthe geselliger Bäume, Wie aus dem lieblichen Silbergewölke der Mond.	Ach! hier sprang, wie ein sprudelnder Quell, der unendliche Wald nicht In die tönende Luft üppig und herrlich empor. Hier frolokten die Jünglinge nicht, die stürzenden Bäche Ins jungfräuliche Thal hoffend und liebend herab. Freundlich blikte kein Dach aus der Blüthe geselliger Bäume, So, wie aus lieblichem Silbergewölke der Mond. Keiner Heerde vergieng am plätschernden Brunnen der Mittag, Und dem Hirten entlief nirgend das lustige Roß.
Die Horen (TLL, S. 116)	**Flora 1801 (TLL, S. 218)**
Ach! Nicht sprang, mit erfrischendem Grün der schattende Wald hier In die säuselnde Luft üppig und herrlich empor, Bäche stürzten hier nicht in melodischem Fall vom Gebirge, Durch das blühende Thal schlingend den silbernen Strom, Keiner Heerde vergieng am plätschernden Brunnen der Mittag, Freudlich aus Bäumen hervor blickte kein wirthliches Dach. Unter dem Strauche saß ein ernster Vogel gesanglos, Aengstig und eilend flohn wandernde Störche vorbei.	Aber auf denen springt kein frischaufgrünender Wald nicht In die tönende Luft üppig und herrlich empor. Unbekränzt ist die Stirne des Bergs und beredtsame Bäche Kennet er kaum, es erreicht selten die Quelle das Thal. Keiner Heerde vergeht am plätschernden Brunnen der Mittag, Freundlich aus Bäumen hervor blikte kein gastliches Dach. Unter dem Strauche saß ein ernster Vogel gesanglos, Aber die Wanderer floh'n eilend die Störche vorbei.

表2　レイタニ版より各媒体に基づいた「さすらい人（Der Wanderer）」の5-12行目。「ホンブルク四つ折りノート」のものについてはヴァリアントも掲載されていることから当該ページの画像で示す。網掛けは「抹消線は引かれていないが、作者によって〔別の語句で〕置き換えられた」部分を示している（TLL, S. CXXVII）。
出所：レイタニ版（引用ページは表中に記載）より筆者作成。

The Significance and Limitations of Hölderlin's *Tutte le Liriche* Edited by Luigi Reitani

Yu Tomizuka

Among the scholarly editions discussed in the history of editing Friedrich Hölderlin's texts, *Tutte le Liriche*, edited by Luigi Reitani (2001), stands out as distinctive. This uniqueness lies in its bilingual format, presenting the German and Italian texts side by side, and in its lack of a specific focus on meeting the needs of scholars. Nevertheless, it is referenced in the history of editing Hölderlin's texts, because this edition is not based on the previous editions. It takes a different approach by starting from criticism of the existing editions and newly editing the texts for translation anew. Against this backdrop, this paper examines the editorial approach and intentions of Reitani's edition, focusing on the arrangement and constitution of the text, which are characteristic of this. It argues that both features have merits and limitations. In addition, this paper offers potential directions for future editions of Hölderlin's text, including those suggested by Reitani.